

論文誌のいっそうの発展のために

伊理 正夫

昨年度より本会論文誌 Journal of the Operations Research Society of Japan の編集担当を命ぜられ、任期も半分以上経過しました。この間、Associate Editors をお願いした阿部俊一、今野浩、大山達雄、若山邦紘の各氏、論文査読をお引き受けいただいた方々、また鈴木規子さんをはじめとする学会事務局の諸嬢(特に論文誌担当の古川幸子さん)のご協力により、内容・体裁ともかなりの水準にある論文誌を予定どおり刊行することができたことは嬉しいことだと思っています。表紙のデザインも、若山氏が、全体の感じを変えないようにしながら、改善していただきましたし、各論文のタイトル・ページの体裁も、阿部氏によって確立されましたが、お気づきでしょうか。

いうまでもなく、質の高い論文誌を学会が着実に刊行し続けることができるためには、質の高い論文がたえず投稿されてくる必要があります。この点、最近では、会員からの投稿数はきわめて安定していて、各四半期約11篇、そのうち約60%が採択・掲載されています。投稿から掲載までの期間は、当然のことながら、論文によりかなりの違いがありますが、平均9.5カ月くらいです。この期間の長さは国際的にみてどちらかという短いほうではないかと思いますが、本会会員のための論文誌であるという性格を考えると、もっと短縮できればそれに越したことはないので、査読者の方々のいっそうのご協力をお願いする次第です。(査読期間以外に、事務手続、印刷などのために平均4.5カ月くらいが必要です。)最近の傾向として、海外の会員、非会員からの投稿の増加がありますが、このことは本学会の国際的地位の向上の反映として、喜ばしいことでありましょう。

さて、投稿されてくる論文、そして論文誌に掲載される論文を見ておまして、率直にいって、もっと“応用志向”のものが多いいのだが、という感想をもちました。このことは、折にふれ、一般会員から本会に寄

せられる強い意見の1つでもあります。すでにORの一手法、一理論として確立された体系の中で、理論、手法の拡張、精密化を行なうことは、たしかに意味のある重要なことではあり、また、そのような性格の論文が書きやすく、査読を通りやすいということも否定できません。しかし、ORが他の数学、応用数学の諸分野と異なるところは、やはり“現実の問題との関連”の重視と、それにとりまわり新しい発想の展開とにあるのではないのでしょうか。

実は、このような立場からの反省は、現在ORに関係のあるいくつもの国際的な学術誌の編集者の間で真剣になされております。そして「応用重視とはいっても口でいうほど簡単ではない」、「応用的な論文は理論的なものにくらべて質が悪い傾向がある」、「本当に良い応用的な論文が書けるような人は多忙で論文を書くことにあまり関心を示さず、また、非常にすぐれた応用例は公表したがるものだ」、等々の悲観論も多く出されて、応用重視の方針をいかにして具現するかについての名案が出せずに困惑しているというのが現状のようです。しかし、「その存在価値が本来応用との関連において認められてきたような学問分野においては、常に初心に帰っての反省を怠らないことこそがその分野が生き残る道である」という主張もなされており、具体的な方法を試行し始めたところもあります。

私としては、本会論文誌に関する限り、編集担当の歴代の理事の方々が築いてこられた伝統的な編集方針、制度を変える必要は少しもないと思います。ただ、下記のような点について、論文を投稿される方、投稿しようとする方、査読をしてくださる方、そして論文誌を読まれる多くの会員の方々に対し、問題を提起し、ご意見を求め、そして、それぞれの立場からのご協力をお願いしたいのです。

- (a) 理論的に新しい所がなければ論文にならないという考え方は果たして正しいか。「最近の社会、産業で重要視されている典型的な問題に対して、いくつかのORにおける既知の方法で接近を試みたところ、最も旧式な簡単な方法が、これこれこういう意味で、最も有効であった。」というような経験を整理したものは、応用の論文としてはORに関心のある人たちにとって(理論家も含めて)大いに価値があるろう。
- (b) 理論的に新しい所がありさえすれば論文になるという考え方は果たして正しいか。ORの論文として

いり まさお 東京大学

は、その新しい点が、たとえ間接的であるにせよ、どのような現実の問題にどのように貢献するのかを論じてほしい。たとえば、“数値例”をあげるときには、方法の理解を助けるための現実離れした“例のための例”も必要であろうが、現実的な環境のもとで発生しそうな簡単な例も必ずあげるように努力すべきではないか。(もっとも、これは大変困難であることが多いが、このような努力を通じて、自分の研究のORにおける意義を反省し、研究の方向の軌道修正や内容の改善ができるのが常である。)

- (c) 理論的研究の中には、直接実用の役には立たないと“自信をもって”断言できるようなものもあろう。にもかかわらず、それがORの論文として有意義である場合もある。それは、理論体系の完全化に貢献し、理論の“役に立つ部分”と“役に立たない部分”とのコントラストを明確にすることによって、応用

家に対しては理論的成果のどの部分をどのように利用すべきかの指針を与え、理論家に対しては将来の研究方向を示唆するようなものである。(実際、ORと計算機科学の接点において、計算可能性や計算複雑度の理論の中には、このような観点からみて意義のある論文が少なくなかった。)しかし、この種の論文においては、上記のような位置づけ、評価を、単に読者にゆだねるのではなくて、著者自身が積極的に自己評価し、ORにおける意義を論文の中に明示的に主張すべきではないであろうか。

- (d) 論文の査読は論文で扱われている主題に詳しい方をお願いするのが常であるが——内容の正確さ、新規性の判定についてはそのような方々のご協力に頼らざるをえない——査読に際しては、関連分野の慣習にこだわらずに、広く全OR的視野に立っての各論文の評価も十分慎重に行なっていただきたい。



●経営コンサルタント●

・第16回 日時：7月4日(土)14:00~17:00 場所：東京都勤労福祉会館 テーマ：決算書から企業の倒産を予測する；杉山高一(中央大学理工学部教授)

誰でも自由に入手できる「有価証券報告書(資本金1億円以上の企業の決算書)！記載の各種経営指標の主なものを、判別分析で最もよく用いられる変数増減法によって分析し、判別に有効な変数をえらびだして見たところ、金利負担率、当座比率、総資本回転率がそれであることが判明した。また倒産と非倒産については、金利負担率が相当有効な指標であることも算出された。

・第17回 日時：8月8日(土)14:00~17:00 場所：東京都勤労福祉会館 テーマ：経営経済データベースによるコンピュータの活用法；今村 達(日本 CDC CALL 営業部)

CDC社はIBMに次ぐ世男第2のコンピュータ企業で、その超大型機とともに、その全世界にわたるネットワークによるデータサービスには定評がある。今回は、

仮定に対する答も含め、疑問に答えながらモデルを作成し分析し計画を策定するPROPHIT-IIについて実際データにもとづき解説をしていただいた。この続きは今村氏が海外出張から帰朝後にする予定である。

・第18回 日時：9月5日(土)14:00~17:00 場所：東京都勤労福祉会館 テーマ：経営コンサルタントとオペレーションズ・リサーチ；福島憲治(日本歯科医師会)

経営コンサルタントの現況をなま情報と文献と統計などをもととして総括され、かつ、オペレーションズ・リサーチによる経営問題の解決について関係者の研鑽と意見交換の機関を設立し、そこでギブアンドテイクの原則で機能するようなコミュニケーションの場がうまれるようにしては、とのご提案があった。

●日本における社会システム分析●

・第14回 日時：9月12日(土)14:00~17:00 場所：小野勝章事務所会議室 出席者：9名 議題：80年代の安全保障問題；小岩 明(社会環境システム研究所)

日本における社会システムと安全保障問題がどのようにかかわり合いをもつかを研究したものであった。安全保障という問題は、その範囲はきわめて広く、かつ観念論的に陥りやすく、実体の把握は人によってまちまちであることが判明した。したがってどのような状態をもって安全保障が達成できたといえるかといった本質問題から再度アプローチすることとした。